



日本工学アカデミー創立 30 周年記念行事

専務理事 永野 博 / HIROSHI NAGANO

日本工学アカデミーは昭和 62 年 (1987 年) に発足し 30 周年を迎えた。これを祝い、平成 30 年 (2018 年) 1 月 19 日 (金)、ホテル JAL シティ田町において、日本工学アカデミー創立 30 周年記念行事を、招待者と会員、あわせて 150 名以上の参加を得て盛大に開催した。記念行事は、第 1 部「記念式典」、第 2 部「記念講演」、第 3 部「記念祝賀会」の 3 部構成で組み立てられた。

第 1 部の記念式典では、阿部博之会長が冒頭、設立前後から今日まで関係された方々に感謝の意を表するとともに、これから大きな使命感のもとに社会の持続的発展に貢献していくと挨拶され、経済界を代表して中西宏明経済団体連合会副会長、学界を代表して吉川弘之日本学士院会員 (日本学術振興会学術最高顧問)、両名からの 21 世紀を展望した祝辞をいただいた。引き続き、フェレレス国際工学アカデミー連合 (CAETS) 2017 年総裁からのビデオメッセージの披露、小泉英明上級副会長からの「30 年の歩みとこれからの活動」と題した活動報告が行われた。

第 2 部の記念講演では、まず、沖大幹国際連合大学上級副学長 (東京大学生産技術研究所教授) が「持続可能な開発を支える科学技術」と題する講演を行い、千年後にも感謝される文明の構築を呼びかけられた。次いで、高橋政代理化学研究所多細胞システム形成研究センター網膜再生医療研究開発プロジェクトプロジェクトリーダーが「iPS 細胞と網膜再生医療開発で学んだこと」をテーマに講演を行い、「行きあたりバッチリ！」を実現してきたこれまでの研究活動における、未来から考える発想を紹介された。

第 3 部の記念祝賀会は来賓を代表し、先ず、尾身幸次元財務大臣から難しい時代における日本工学アカデミーの政策提言活動に対して強い期待が述べられた。次いで、会員でもある和泉洋人内閣官房内閣総理大臣補佐官からのメッセージが披露された。その後、戸谷一夫文部科学省事務次官、森昌文国土交通省技監、末松広行経済産業省産業技術環境局長、斎藤保株式会社 I H I 代表取締役会長が祝辞を述べられ、小宮山宏名誉会長の乾杯により、祝宴の開催となった。最後に堀幸夫顧問による設立発起人挨拶、隈部英一元専



阿部博之会長



中西宏明氏



吉川弘之最高顧問



沖大幹会員



高橋政代氏



尾身幸次氏



小宮山宏名誉会長

務理事による会員代表挨拶のあと、中村道治 30 周年記念事業企画委員会委員長による閉会の辞により、盛況のうちに終了した。

(創立 30 周年記念行事のお写真はこちらからご覧いただけます → <https://www.eaj.or.jp/?name=keisai>)



本アカデミー会員である藤嶋昭東京理科大学学長が文化勲章をご受章されました。

熱力学によれば電気化学的に水を分解するには 1.23 V の電位差が必要です。このことは白金参照電極を用いたとき、正極には 1.23 V 以上が必要ということの意味しています。ところが 1960 年代終わりごろ、当時、東大の修士学生であった藤嶋先生は酸化チタン電極を正極に使い、紫外線を照射すると 1.23 V よりも低い電位で酸素が発生する現象を見出したのです。「ホンダ・フジシマ効果」の発見です。反応に光が関与したためで、現在では当然のことと納得できますが、当時は全く理解されず、学会発表などでずいぶん苦労されたそうです。しかし、1972 年にこれが Nature に掲載される

と世界中の研究者の注目を集め、半導体光電気化学という分野の幕開けとなりました。

1990 年代になり、先生は酸化チタンのご研究を、微弱光下での光触媒反応という新たな分野へ展開されました。材料表面の汚れ物質を分解しようという考えです。それまでの光触媒反応が水分解や水処理といった三次元空間にある物質を対象としていたのに対し、藤嶋先生の研究は反応系を二次元表面にしたことに特徴があります。これにより微弱な紫外線の下でもセルフクリーニング効果や抗菌効果など極めて実用的な機能が得られ、現在、光触媒反応を利用した機能建材は広く社会に使われています。

このたびのご受章は、先生のご業績は単に科学、技術分野にとどまらず、広く文化に貢献するものと認められた結果と推察いたします。心からお喜び申し上げます。

NEWS

国際工学アカデミー連合総会（CAETS 2017）に出席して

上級副会長 小泉 英明／HIDEAKI KOIZUMI

常務理事・CAETS 実行委員長 長井 寿／KOTOBU NAGAI

国際工学アカデミー連合（CAETS*）の 2017 年総会は、スペイン王立工学アカデミーが主催して、11 月 13 日（月）～ 17 日（金）にスペインの首都マドリードで開催されました。総会は、26 カ国加盟の工学系アカデミーの代表が出席する CAETS 評議会と、併催シンポジウムが中心となります。また、評議会に先立って理事会が開催されます。EAJ の小泉英明上級副会長が、2016～2017 年度の CAETS 理事に就任しており、まず、理事会に出席しました。そこは評議会承認が必要な本年度決算・次年度予算・活動計画・今後のビジョン等々を審議します。また、阿部博之会長の名代として評議会・併催シンポジウムに長井寿常務理事とともに出席しました。

詳細な審議内容は、CAETS ホームページに掲載されるので割愛しますが、世界の科学技術の最新動向が明らかになる機会でもあり、その点を中心にご報告致します。

2011 年の CAETS 総会以来、エンジニアリング（工学）やイノベーションは何のためか？という本質的な議論が、最先端エンジニアリングの技術的内容とともに活発になりました。そして、社会に貢献する工学・工学教育・工学倫理についても熱心に議論されています。2016 年の CAETS 総会（ロンドン；英国王立工学アカデミー主催）では、「より良き世界を工学する」（Engineering a Better World）とい

う新ビジョンが主題として議論されると共に、多様性と次世代の工学教育をテーマに、英連邦のアフリカ諸国等を招いた併催シンポジウムが開催されました。このビジョンは国連の「持続可能な開発目標」(SDGs)と結合し、EAJが2011年から提唱してきた「人類の安寧とより良き生存」(Human Security and Well-Being)や「未来社会を工学する」(Engineer** the Future)に合致するものです。

今年のCAETSでは、このビジョンが継続されると共に、E. フェレレス CAETS 総裁 (スペイン王立工学アカデミー会長) の発案にて、評議会の中で「工学倫理」のパネルセッションが実施されました。3名の基調講演者の一人として、小泉上級副会長が講演してパネルに加わりました。熱い議論の中、「多様性と包摂」(Diversity and Inclusion)の概念は、現実の世界に極めて重要だと感じられました。InclusionはExclusion(排除)の対義語であって、多様性と並行して発生する「排除」の解決こそ、今後の重大課題であることが見えてきました。高齢化・経済格差・難民/移民などに直結し、工学にとってもSDGsと並行する喫緊の課題と思います。

理事会・評議会でのもう一つの重要課題は、2016年に再出発したアカデミーの連合組織IAP***に対するCAETSの立ち位置です。CAETSもアカデミー連合組織であり、その加盟アカデミーは厳密な定款基準を満たしています。それが、26カ国の代表工学系専門家集団(1国1代表アカデミー)としての有効性を担保するからです。結局、CAETSは職権ボードメンバー(Ex-officio board member)として、IAP for Research(旧IAC: Inter-Academy Council)に参画することになりました(日本学術会議は一般ボードメンバーとして参画します)。

今回のCAETS併催シンポジウムのテーマは「バイオエコノミーの挑戦」(Challenges of the Bioeconomy)でした。新IAPは全米アカデミーズと同じく、3本の柱に医療系を含めました(Science/Engineering/Medicine)。そして、今回のCAETSが生物系工学と経済を結合させたことは、EAJの将来ビジョンにも示唆するものがあります。

一方、以上述べましたCAETSの会議時間の合間を縫って、長井常務理事と一緒に、米国・中国・韓国・英国・ドイツ・豪州・スウェーデン・インド他の各工学系アカデミーと、二カ国間連携の話し合いを行いました。多くの案件が議論され、また、結論を得ましたが、ここでは割愛します。先端技術の現地紹介は、エアバス社の工場に案内されましたが、使用された炭素繊維テープの長さが機体の生産量の指標となる製作工程に、目を見張るものがありました。



CAETS から EAJ への感謝状

なお、CAETS 閉会直前に、フェレレス CAETS 総裁とデイビッド CAETS 事務局長のサインの入った貢献感謝状 (Certificate of Appreciation for Outstanding Service) が、EAJ に授与されました。

*CAETS: International Council of Academies of Engineering and Technological Sciences

** 名詞ではなく動詞

***IAP: Inter-Academy Partnership (旧 Inter-Academy Panel)



CAETS2017 評議会終了直後の記念撮影：最前列向かって左より、Dame A. Dowling 英国王立工学アカデミー会長、E. Fereres CAETS 総裁 (スペイン王立工学アカデミー会長)、小泉英明上級副会長、2列目同左より、R. David CAETS 事務局長、A. van Cauwenberghe 元ベルギー王立工学アカデミー会長、長井寿常務理事、L. Caceres ウルグアイ工学アカデミー会長 (次期 CAETS 総裁)。

(スペイン王立工学アカデミー提供)

日豪若手研究者交流促進事業総括会議 日豪若手先端研究者による環学的新学術フォーラム 2017 報告

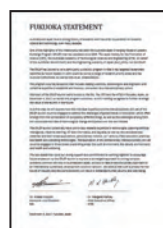
上智大学 理工学部准教授 藤田 正博／MASAHIRO FUJITA

日豪若手先端研究者による環学的新学術フォーラム 2017 (ERLEP Trans-disciplinary Forum 2017) が昨年 12 月 5 日 (火)、6 日 (水) に福岡において、ANA クラウンプラザホテルで寝食を共にする集中合宿形式で開催された。本フォーラムは日豪若手研究者交流促進事業 (ERLEP: Emerging Research Leaders Exchange Program) に参加した日豪の研究者が主体的に企画したものであり、国際的・社会的な提言として、グローバルな学術的連携推進事業などの提案を纏め、日豪の関連政府機関等へ発信することを主目的とした。

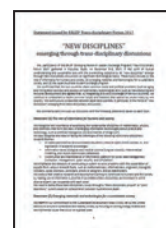
フォーラムには、ERLEP 派遣研究者を中心に選抜された日本側 21 名、豪州側 6 名の計 27 名の若手研究者に加え、EAJ からは小泉英明上級副会長、長井寿常務理事に参加いただいた。初日は The role of informatics for humans and society、Emerging materials and technologies for a sustainable society、Japan/Australia student exchange program という 3 つのテーマについて、テーマ毎に参加者を 2 チームに分けて、延べ 7 時間半集中的に討議した。二日目は、全員参加の総合討論を行うことで意見を集約し纏めた。本フォーラムの主目的は見事に達成された。これも偏に日本側運営委員長の伊藤一秀氏他のご尽力によるものであり、同世代の研究者として尊敬の念を抱かずにはいられない。

人類が今後取り組むべき課題は地球規模であり、環学的、さらには多国間での協力関係が不可欠であることは論を俟たない。日豪の協力関係が課題解決の一助になると確信した。ERLEP の一員として本フォーラムの企画・運営に携われたことは望外の喜びであり、遅ればせながら自分の取るべき行動を強く自覚した次第である。

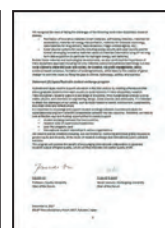
本フォーラムは、日本学術振興会、東京倶楽部、関記念財団の財政支援のもと、若手主導で企画・運営された。12 月 4 日 (月) にはフォーラムに先立ち、日本学術振興会、EAJ、豪州理工学アカデミー (ATSE) の共催で、ERLEP 同窓生も招き、日豪若手研究者促進事業総括会議 (ERLEP toward the next big step) を持った。過去 4 回の交流を振り返り、その成果や意義を確認し、さらに今後の新たな協力についての合意事項を EAJ—ATSE 共同声明 “Fukuoka Statement” に纏めた。また、フォーラムの成果は、ERLEP 同窓生声明 “New Disciplines emerging through trans-disciplinary discussion” として纏められている。
(Statement の全文はこちらからご覧いただけます→ <https://www.eaj.or.jp/?name=keisai>)



Fukuoka Statement



New Disciplines emerging through trans-disciplinary discussion



第4回 EAJ 中部レクチャー 「金沢工業大学における教育改革～自ら考え行動する技術者の育成～」報告

中部支部幹事長 水谷 法美／NORIMI MIZUTANI

日本工学アカデミー中部支部では、第 4 回 EAJ 中部レクチャーを 2 月 3 日 (土) に中部大学リサーチセンターにて開催した。今回は、金沢工業大学にて教育改革を遂行し「教育付加価値日本一」の大学

へ導かれた同大学名誉学長の石川憲一会員に講演をお願いした。本稿はその報告である。

講演に先立ち、ホスト校の中部大学・石原修学長より講師



石川憲一会員



石原修氏



懇親会挨拶：
太田光一理事・副支部長



林良嗣理事・支部長

の石川会員の業績紹介も交え、本日の講演から多くを学びたいとのご挨拶をいただいた。また、中部工業大学として、金沢工業大学とほぼ同時期に開学された同大学の取組を紹介いただくとともに、日本工学アカデミーへの期待が述べられた。

引き続いて石川会員に「金沢工業大学における教育改革 ～自ら考え行動する技術者の育成～」と題して講演していただいた。

金沢工業大学は創設当初より、図書館の充実に力を入れて 50 万冊超の蔵書を擁し、図書情報技術教育に力が注がれた。1991 年に発表された大学設置基準の大綱化をきっかけに、同大学では 1992 年に「教育改革検討委員会」が設置され、教育改革の検討を開始し、大学審議会、経団連や経済同友会等の提言がレビューされた。デューク大学など米国有力大学の視察から、日本の大学では多くの教員の仕事は研究だと思い込んでいるが、米国の優れた大学では学生にいかなるスキルをつけるかに腐心し、教育を極めて重視していることを学んだ。

これらに基づいて、金沢工業大学の 21 世紀における飛躍の原動力となるべき新しい教育システム等に関する制度設計が行われた。

1992 年に発足した教育改革検討委員会では、年間 100 回超の討議を重ねられた。そこで洗い出された 1 つの重要課題は、1) 授業が学生にとってつまらなく、教員が不親切であり、教員の認識とのミスマッチがあったこと、2) 学生、教員、事務職員間の信頼関係に欠けていたこと、であった。ここから、数学、物理、化学の教員は研究室を廃止してオープンな部屋に集まり、学生がいつでも相談に訪れることができるセンターが生まれ、年間 1 万 5 千人の学生が質問に訪れた。

そして、Education とは教えることではなく、自ら学ぶ力をつけることと定義し、「教学半（教え半分、学び半分）」として教育を定義した。横断型思考のエンジニアリング・デザインをカリキュラムの基軸に据え、具体的には、1) 創造力と組織的行動力を養うプロジェクト・デザインを導入し、他方では、2) 社会に適合する力（人間力）を養うためにカッターボート・トレーニング合宿などを導入した。これらの教育改革の成果が、2006 年度実績で就職率 99.8%、学生の大学への満足度 80%の達成として表れた。

こうして、4 半世紀に亘る教育改革の実践について語られた講演内容は、近年関心の高い大学のガバナンスにも通じ、教育の質保証に対する取組や、学生が自ら学習に取り組む環境作りなど、大学関係者のみならず産業界からの出席者にとっても大変参考になる豊富な内容であり、レクチャー参加者の満足度も大きかったと感じられた。

林良嗣支部長による閉会の辞の後、中部大学不言実行館のレストラン「アロハテーブル」にて懇親会を行った。講演会への参加者は、産業界から石丸典生中部支部名誉顧問（デンソー元社長）、学界からは東海・北陸両地方の各大学の学長、副学長を務める会員など 43 名であった。また、懇親会へは半数以上の 22 名の参加をいただいた。石川会員を囲んでの歓談も盛り上がり、中部大学マンドリン部の演奏とも相俟って、充実した懇親会となった。

最後に、講演いただいた金沢工業大学名誉学長・石川憲一会員、参加者、ならびに第 4 回 EAJ 中部レクチャーの実施に尽力いただいた中部大学および EAJ 中部支部の関係各位に深甚なる感謝の意を表する次第である。

◇日時：2018年2月9日（金）13:00～14:40

◇会場：（独）国立高等専門学校機構 佐世保工業高等専門学校

◇講師：稲永俊介氏（九州大学大学院システム情報科学研究院准教授）

興 雄司氏（九州大学大学院システム情報科学研究院教授）

上記講演会は、佐世保工業高等専門学校の学生、教職員を対象とする講演会であり、約200名の参加があった。司会は山田淳理事・副支部長を務めた。



まず、谷口功副会長・副支部長による挨拶と本会ならびに九州支部設立の経緯や活動内容等の紹介があった。

次に、東田賢二校長による歓迎の挨拶があった。本校が情報セキュリティ人材育成事業の拠点校に選定されていることなどから、情報関連の講師依頼があり、以下の2名の気鋭の研究者による講演を計画した。

まず、稲永俊介氏が「アルゴリズムのチカラ：大規模データ処理からAIまで」というタイトルで講演された。アルゴリズムとは「計算の手順」であり、実は飛行機の自動操縦など身近なところに多く使われていること、さらにパソコンやスマートフォン上で行われるあらゆる計算処理もアルゴリズムに従って行われていることを紹介された。また、近年大きな注目を集めているAIや大規模データ処理の話題も交え、講演者の研究成果などを事例に挙げながら、アルゴリズムの魅力についてわかりやすく紹介された。

次に、興雄司氏が「光技術とIT技術を利用したIoTで世界を測る」というタイトルで講演された。電気電子工学の最近の進展、とくにIoTの現状についての紹介があった。パソコン（PC）とインターネットの発展が、世界的にはファブラボの様な「誰でも設計・開発できる」状態を作り出しているが、まだスマホではなくPCがこの世界では主役であることについて話された。一方、機械学習については、実演を交えながら学習の特長や課題などについて紹介された。講演終了後も学生からの質問が相次ぎ、情報分野への関心の高さが伺えた。

講演会終了後、キャンパス見学が行われた。ロボコンをはじめ特徴ある取り組みの紹介があり、密度の高い講演会であった。交流会においても活発な意見交換が行われた。AIをはじめとする情報技術の役割が今後益々社会に深く入り込んでゆくことの功罪や、工学教育の在り方についても活発に議論が行われて、盛会のうちに終了した。



谷口功副会長・副支部長



東田賢二氏



稲永俊介氏



興雄司氏



山田淳理事・副支部長

新入正会員のご紹介

(2017 年 11 月入会者)

[第 1 分野]

い わ い よ し ろ う
岩 井 善 郎



福井大学理事・副学長

福井市出身。1972 年福井大学卒業。1977 年京都大学大学院工学研究科博士課程機械工学専攻単位取得退学。1980 年工学博士。福井大学工学部講師、助教授、教授、工学部長を経て、2013 年より現職。専門はトライボロジー、機械材料学。

さ さ き な お や
佐 々 木 直 哉



(株) 日立製作所研究開発グループ技師長

1982 年東北大学大学院工学研究科修士課程終了後、(株) 日立製作所機械研究所入所。銀行端末やプリンタ、HDD 等の製品開発、シミュレーション技術開発に従事。2014 年より現職。専門は媒体搬送、分子動力学、数値流体シミュレーション。博士 (工学)。

そ や ま ひ と し
祖 山 均



東北大学大学院工学研究科 (ファインメカニクス専攻) 教授

1963 年長野市生まれ。東北大学大学院工学研究科博士後期課程修了 (工学博士)。東北大学助手、助教授を経て 2003 年より現職。専門は材料力学、破壊力学、流体工学、特に流体現象を活用した金属材料の表面力学設計に関する研究。

た だ の し げ る
但 野 茂



(独) 国立高等専門学校機構理事・函館工業高等専門学校校長

北海道生まれ。1984 年北海道大学大学院工学研究科修了。工学博士。北海道大学助手、講師、助教授を経て 2001 年工学研究科教授。2004 年科学技術振興機構研究領域主幹 (併任)、2015 年函館工業高等専門学校長、2016 年国立高等専門学校機構理事、2017 年日本学術会議会員。専門は生体機械工学、生体医工学。

と み や ま あ き お
富 山 明 男



神戸大学大学院工学研究科長・教授

茨城県生まれ。1984 年東京工業大学理工学研究科原子核工学専攻博士前期課程修了、1990 年工学博士 (東京工業大学)。(株) 日立製作所エネルギー研究所研究員、神戸大学工学部助手、助教授を経て、2003 年より現職。2015 年より神戸大学工学研究科長・工学部長、2017 年より日本混相流学会会長。流体工学、特に気泡・液滴力学と気液二相流の理論・実験・数値計算を専門としている。

み や ざ き の り ゆ き
宮 崎 則 幸



北九州市環境エレクトロニクス研究所

パワーエレクトロニクス信頼性研究室室長・主席研究員

1948 年東京生まれ。1977 年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、工学博士。日本原子力研究所を経て、1983 年九州大学助教授、1996 年同教授、2004 年京都大学教授、2013 年同定年退職。2015 年より現職。計算固体力学をベースとした電子デバイス実装の信頼性評価に従事。

[第 2 分野]

あ さ み と お る
浅 見 徹



(株) 国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 代表取締役社長

1952 年群馬県生まれ。1976 年京都大学大学院工学研究科電気第二工学専攻修士修了。同年国際電信電話 (株) (KDDI) に入社。2001 年 (株) KDDI 研究所代表取締役所長。2006 年東大・大学院情報理工学系研究科教授を経て 2017 年より現職。UNIX ネットワークの国際接続、ネットワーク障害診断、xDSL の実証実験等に従事。博士 (情報理工学)。情報ネットワークと社会との関係について、これまでの経験を活かした貢献をしたいと思います。

あべ つよし
阿部 剛士



横河電機（株）執行役員・マーケティング本部長

大阪生まれ。1985年インテル・ジャパン（株）（現インテル株式会社）に入社。広報室長、技術本部長、マーケティング本部長などを経て、取締役副社長兼執行役員、製造技術本部本部長を歴任。2016年、横河電機株式会社執行役員兼マーケティング本部長に就任（現職）。従来の広報・広告、ブランディングなどのマーケティング活動だけではなく、研究開発部（R&D）、M&A戦略室、事業企画・開拓室、特許戦略室、標準化戦略室、工業デザイン室も統括。専門は「戦略論」、「組織論」。

えんどう もりのぶ
遠藤 守信



信州大学特別特任教授

1946年長野県須坂市生まれ。信州大学特別特任教授。1990年より信州大学工学部教授としてカーボンナノチューブ等の新炭素体の基礎科学とそれらのリチウムイオン電池などへの応用について一貫して研究展開している。

おがわ まつと
小川 真人



神戸大学理事・副学長

1985年東京大学大学院工学研究科修了。工学博士。神戸大学助手、助教授、教授を経て2015年より現職。専門は、第一原理的ナノデバイスシミュレーション。応用物理学会フェロー。

かねこ しゅんいち
金子 俊一



北海道大学大学院情報科学研究科教授

昭和30年生まれ。1978年北海道大学工学部卒業、1980年同大学院工学研究科修了。東京農工大学工学部数理情報工学科助手として画像計測の研究に従事。1990年東京大学より工学博士。1991年より同助教授。1996年より北海道大学工学部助教授、2004年より同情報科学研究科教授としてロボットビジョン、ロバスト画像処理の研究に従事。

き た たかし
喜多 隆



神戸大学教授

1963年奈良県生まれ。1987年関西学院大学大学院理学研究科修士課程修了。1989年大阪大学大学院基礎工学研究科博士課程中退。神戸大学助手、助教授を経て、2007年より現職。半導体ナノ構造を利用した光電子工学の研究に従事。応用物理学会フェロー。

くろだ ただひろ
黒田 忠広



慶應義塾大学理工学部（電子工学科）教授

1959年生まれ。1982年東京大学工学部電気工学科卒業。同年（株）東芝入社。2000年に慶應義塾大学に移り、2002年より教授。2007年カリフォルニア大学バークレイ校 MacKay Professor。専門は集積回路とコンピュータ。

たまき ひさし
玉置 久



神戸大学大学院システム情報学研究科教授

1962年和歌山市生まれ。1990年京都大学大学院工学研究科博士後期課程電気工学専攻研究指導認定退学。京都大学工学部助手、神戸大学工学講師、助教授、教授を経て、2010年より現職。博士(工学)。電気学会フェロー。専門はシステム最適化、特にシステム運用・計画問題の数理モデル化と解法。

〔第3分野〕

こばやし よしみつ
小林 喜光



(株) 三菱ケミカルホールディングス取締役会長

1971年東京大学大学院理学系研究科相関理化学修士課程修了、理学博士。ヘブライ大学、ピサ大学への留学を経て1974年三菱化成工業入社。三菱化学にて職務を歴任し2015年より現職。地球快適化インスティテュート取締役会長、産業競争力懇談会(COCN)理事長等も務める。

ながの ひろさく
永野 広作



(株) カネカエグゼクティブ・フェロー

1975年東京大学卒業、鐘淵化学工業(株)(現(株)カネカ)入社。主としてエレクトロニクス材料研究に従事、研究所長、研究管理部長、新規事業開発部長を経て、2014年副社長・CTO。2017年より現職。石川県出身。幅広い技術領域の知識を活用し、技術の融合と新事業の創出に貢献したい。

のぎ きよし
野城 清



大阪大学名誉教授

1945年大阪府生まれ、1973年大阪大学工学研究科博士課程修了後、大阪大学助手、助教授を経て、1995年教授。2009年同名誉教授。専門は金属材料工学、溶接工学、粉体工学。今後は日本の中小企業を支援していきたい。

ますだ たかお
増田 隆夫



北海道大学大学院工学研究院長・工学部長

1957年岐阜県生まれ。1982年京都大学大学院工学研究科博士課程単位取得退学。工学博士。京都大学助手、講師、助教授を経て2001年北海道大学教授。2017年より現職。専門は化学工学、触媒反応工学。特に、非可食バイオマスや重質油の化学資源化プロセスの研究。

〔第4分野〕

おき たいかん
沖 大幹



国際連合大学上級副学長、国際連合事務次長補

1993年東京大学より博士(工学)。東京大学総長特別参与ならびに生産技術研究所教授を兼務。専門は土木工学/水文学で、地球規模の水循環と世界の水資源に関する研究。国土審議会委員ほかを務める。書籍に『水の未来』(岩波新書)など。表彰に日経地球環境技術賞、日本学士院学術奨励賞など。

くすみ はるしげ
楠見 晴重



関西大学理事・環境都市工学部教授

1953年大阪市生まれ。1981年関西大学大学院工学研究科博士課程中退。工学博士。関西大学工学部助手、助教授を経て、2002年教授。2008年関西大学環境都市工学部長、大学院工学研究科長。2009～2016年同大学長。2014～2016年(一社)日本私立大学連盟副会長。専門は岩盤力学、地盤工学。

〔第6分野〕

かとり ひでとし
香取 秀俊



東京大学大学院工学系研究科(物理工学専攻)教授

1964年生まれ。東京大学物理工学専攻修士課程修了。1994年博士(工学)。マックスプランク量子光学研究所客員研究員、東京大学総合試験所助教授等を経て、2010年より現職。2011年より理化学研究所、主任研究員を兼務。光格子時計の提案、実証とその応用に関する研究。

たけだ ひろし
武田 廣



神戸大学学長

1949年愛媛県生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。東京大学理学部助手、助教授を経て、1989年より神戸大学理学部教授。神戸大学理学部長、附属図書館長、理事・副学長を経て、2015年より現職。専門は加速器を用いた高エネルギー物理学。

やまぐち えいいち
山口 栄一



京都大学大学院教授

1955年福岡市生まれ。物性物理学、イノベーション論。1979年東京大学大学院理学系研究科修士課程修了。理学博士。NTT基礎研究所主幹研究員、21世紀政策研究所研究主幹、同志社大学大学院教授を経て2014年より現職。3社のベンチャー企業を創業。

【第7分野】

さかた やすし
坂田 泰史



大阪大学大学院医学系研究科（循環器内科学）教授

1967年京都府生まれ。2002年大阪大学大学院医学系研究科博士課程終了。医学博士。2013年より現職。研究テーマは心不全の病態生理解明と新しい治療手段の開発。大阪発の新しい循環器医療を世界の患者さんに届けたいという夢を追っています。

さわ よしき
澤 芳樹



大阪大学大学院医学系研究科（外科学講座心臓血管外科学）教授

1955年生まれ。1980年大阪大学医学部卒業。2006年～大阪大学大学院医学系研究科心臓血管外科主任教授（現在に至る）。2015年～2017年同大学医学系研究科研究科長・医学部長兼任。2016年厚生労働大臣賞、日本医師会医学賞受賞。専門は心臓血管外科学。

【第8分野】

つじ あつこ
辻 篤子



名古屋大学国際機構国際連携企画センター特任教授

1953年京都市生まれ。1976年東京大学教養学部教養学科科学史科学哲学分科卒業、ソニー（株）入社。1979年朝日新聞社入社、科学部、アメリカ総局などを経て2004年～2013年論説委員、科学技術、医療などを担当。2016年10月より現職。名古屋大学ホームページでコラム「名大ウォッチ」を掲載中。

賛助会員

(2017年11月入会)

横河電機株式会社

大木 道則会員
2016年11月23日逝去 88歳
東京大学名誉教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1950年3月 東京大学理学部化学科卒業
1950年3月 東京都立大学理学部助手
1956年9月 東京大学理学部助教授
1962年4月 同 大学理学部教授
1987年4月 EAJ 入会
1988年4月 岡山理科大学理学部教授

鈴木 雄一会員
2017年4月25日逝去 73歳
産学国際特許事務所所長

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1966年3月 早稲田大学理工学部卒業
1974年3月 東北大学大学院工学研究科博士課程
金属材料工学専攻修了
1974年4月 古河電気工業（株）入社
1998年10月 同 取締役研究開発本部横浜研究所長
2001年6月 同 常務取締役研究開発本部長
2002年3月 EAJ 入会

横堀 武夫会員
2017年10月9日逝去 99歳
帝京大学名誉教授
東北大学名誉教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1941年12月 東京大学工学部航空学科卒業
1957年7月 東北大学教授
1966年-1985年 日本学術会議第5部会員
1971年6月 日本学士院賞受賞
1981年4月 東海大学教授
1987年4月 EAJ 設立発起人

多田 邦雄会員
2017年12月30日逝去 79歳
東京大学名誉教授
金沢工業大学客員教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1960年3月 東京大学工学部電気工学科卒業
1965年3月 東京大学大学院博士課程修了、工学博士
1966年4月 東京大学助教授（工学部電子工学科）
1981年6月 同 大学教授
1989年1月 IEEE Fellow
1992年11月 EAJ 入会

熊谷 信昭会員
2018年1月21日逝去 88歳
大阪大学名誉教授
(株)国際電気通信基礎技術研究所取締役会長

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1953年3月 大阪大学工学部（旧制）通信工学科卒業
1959年9月 同 大学工学博士（旧制）
1971年6月 大阪大学工学部教授
1985年5月 電子情報通信学会副会長
1985年8月 大阪大学総長
1987年4月 EAJ 設立発起人

佐々木 正会員
2018年1月31日逝去 102歳
佐々木正事務所

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1938年3月 京都大学工学部電気工学科卒業
1962年2月 同 大学工学博士
1973年10月 藍綬褒章受章
1983年4月 シャープ株式会社代表取締役副社長
1985年11月 勲三等旭日中綬章受章
1987年4月 EAJ 入会

第2回オープンフォーラム「世界と繋がる」兼 第1回国際 SDGs フォーラム

(主催：日本工学アカデミー SDGs における科学技術イノベーションの役割プロジェクト)

標題のフォーラムが、2018 年 1 月 28 日(日)に国際大学(南魚沼市)にて開催されました。フォーラムの報告記事は、近日中に HP に掲載を予定しております。<https://www.eaj.or.jp/?name=keisai>

公益社団法人日本工学アカデミー

第6回〈通算 22 回〉定時社員総会及び EAJ フォーラム開催のご案内

公益社団法人日本工学アカデミー

会員各位

本会第6回〈通算 22 回〉定時社員総会を下記の通り開催する予定です。総会後には、例年通り各委員会・プロジェクト報告、そして本年初の試みである EAJ フォーラム及び交流会も計画しております。正式通知は別便にてお届けいたします。

記

- ◇ 日時：2018 年 6 月 6 日(水) 13:00～14:15
- ◇ 場所：ホテル東京ガーデンパレス(東京都文京区湯島 1-7-5)
- ◇ 議題(案)：1) 2017 年度事業報告及び収支決算の承認
2) 2018 年度事業計画及び収支予算の報告
3) 役員の選任等
- ◇ EAJ フォーラム 2018「日本社会の課題と科学技術」 14:30～17:30
- ◇ 交流会 17:30～18:30

編集後記

我が国は科学技術を国の基本としており、工学、なかでもイノベーションに対する社会の期待は大きい。イノベーションの重要性は論を待たないが、イノベーションをイノベーションとするには、いくつもの関門が存在する。大学などが得意とする基礎研究と企業などによる開発研究・技術開発の間には「魔の川」が、技術開発と製品化・事業化の間には「死の谷」が、さらに事業化と市場・産業化の間には「ダーウィンの海」が横たわり、発明・発見が市場・産業にまで展開していくには様々な困難が存在している。工学アカデミーには産官学の有意な人材が揃っており、イノベーションを如何に実現・実装していくか、多様な人材による共創の場を構築し、実効性のある政策提言を行うことが期待される。勿論、これらの提言が「魔の川」、「死の谷」、「ダーウィンの海」を越えて社会実装され、我が国が真の課題解決先進国となるよう積極的に取り組んでいきたい。

(企画・運営委員 松本 洋一郎)



公益社団法人
日本工学アカデミー編集会議